

(5017023 佐田 陸 SATA Hitoshi)

2.3 Language learning and teaching

2.4 Language assessment

2. APPROACH ADOPTED

2.3.1 CEFRが扱う範囲

- ◎ 学習の目標物を述べても
 - 学習者が求められた方法で行動できるようになるプロセス
 - 言語活動ができる能力を開発するプロセス
 - 教師が言語学習・習得のプロセスを容易にする方法
- ◎ これらについては何も語られない

2.3.1 CEFRが扱う範囲

◎ CEFRの主要な役割とは

- 言語を教え、言語を学ぶすべての仲間に対し、目標、対象、方法、そして実際に得られる結果を、可能な限り明白に示すこと
- 学習者が有能な言語使用者として言語活動を行うのに必要な知識、技能、態度に限定しない
- 教授方法のみならず、言語学習・言語習得のプロセスをも扱わねばならない

2.3.2 CEFRの役割

- ◎ 多元論的民主主義の基本原則に従う目標
 - 包括性、透明性、一貫性、オープン性、ダイナミック性、非教条的(1章にて)
- ◎ 中立的な立場
 - 言語習得の性質・それと言語学習との関連に関する議論において、どちらか一方の立場に偏ることはない
 - 言語教育への特定の排他的なアプローチを具現化することもない

2.3.2 CEFRの役割

◎ CEFRの本来の役割とは

- 言語学習・教授過程に携わるすべての仲間に、自身の理論的土台と実践的手順を可能な限り明白、かつ透明に述べてもらえるように奨励すること
- 利用者が頼りにできるパラメータ、カテゴリ、基準、尺度の設定
- より広い選択肢、従来検証されていない仮説を検討させる

2.3.2 CEFRRの役割

- ◎ 仮説を問う、というのは、仮説が間違っているというのではない
 - 理論と実践の再検証によって何か大きなものが得られる
 - 再検証において、他の専門家たちが自国、あるいは他のヨーロッパ諸国でとってきた決定を考慮すればよい

2.3.2 CEFRの役割

- ◎ オープンで「中立な」参照枠というのは、方針を欠いているというのではない
 - ヨーロッパ評議會は、参照枠を作るにあたり、1章で挙げた原理からも、各加盟国政府に宛てた大臣會議の勧告文R(82)18とR(98)6からも、決して遠ざかってはいない

2.3.3 4~7章で述べること

◎ 4,5章にて

- いかなる言語の使用者・学習者にも、当該言語の他の使用者と意思疎通を図るのに求められる、言語活動と能力に主眼をおく

◎ 6章にて

- いかにして必要な能力を開発するのか、そして、どうすれば開発しやすくなるのかを述べる

2.3.3 4~7章で述べること

◎ 7章にて

- 言語使用・言語学習におけるタスクの役割を詳しく見る
+ 複言語能力の性質とその開発も検証(6章)
(複言語・複文化主義的アプローチの意味を問う)

◎ 8章にて

- 言語教授と教育政策の多様化が意味するところの探求

2.4 言語能力の評価

◎ これまでの評価

- 言語使用(者)の性質と言語学習・教授の意味するところに焦点を当ててきた



◎ 9章にて、言語能力の評価に関わるCEFRの役割を注意深く見る

2.4 言語能力の評価

◎ CEFRの3つの利用法

1. テストや試験の内容の特定
2. 学習対象の達成基準の決定
 - 話す・書くという特定の行為の評価関連
 - 教師・仲間・自己の継続的な評価関連
3. 現存のテスト・試験の熟達レベルの記述
→資格認定のシステムが異なっても比較できるように

2.4 言語能力の評価

◎ 9章の説明内容

- 評価の手続きを導き出すにあたってなされるべき選択事項の対比
- 各事項における用語の定義と、教育という文脈において評価を下す目的に関連した、利点と欠点の議論
- 一つの選択肢を取ることの意味の明示

2.4 言語能力の評価

- ◎ 評価の実現可能性という問題
 - 問題へのアプローチは、評価の実際上の図式が精巧すぎてはならないという観察に基づく
- ◎ どの程度精巧にするのか適宜判断
 - 公開されている試験のシラバス
実際の試験問題の作成やデータバンクの設立にあたって成される詳細な決定に関連して

2.4 言語能力の評価

- ◎ どの程度精巧にするのか適宜判断
 - 評価者(特に口頭試験の場合)
かなりの時間的なプレッシャーゆえ、ごく限られた数の基準しか扱うことができない
 - 自己評価を望む学習者
次に何に取り組むべきか示唆を得たいとき
時間は比較的あるが、コミュニケーション能力のうち自分にとって重要な要素を選ぶ必要

2.4 言語能力の評価

◎ より一般的な原理

- CEFRが包括的でなければならない
- 利用者は内容を自分で選ばなければならない

◎ 選ぶということは

- 一般的な図式では切り分けられていたものを一緒に扱うような、より単純な分類の利用を意味する
- 使用者の目的によっては、特に重要な部分のカテゴリと具体例を拡大することも

2.4 言語能力の評価

◎ 9章にて

- 生じてくる様々な問題を議論
- 多くの試験機関によって採用された熟達度評価の基準を紹介、議論を解説

2.4 言語能力の評価

◎ 9章の効果

- 多くの利用者

→より見識豊かで、かつ批判的な態度で、公開されている試験のシラバスにアプローチできる

- 試験機関

→国内外レベルでの資格認定試験のための目標、内容、基準、手順に関して、どのような情報を提示すべきなのか、認識を高める

2.4 言語能力の評価

◎ 9章の効果

- 教員養成者

→初期の職場訓練において教師間で問題となる評価について、意識を高めることに役立つ

2.4 言語能力の評価

◎ 教師

- 形成的にも総括的にも、あらゆるレベルの生徒の評価に対し、ますます重くなる責任を負っている

◎ 学習者

- 学習計画を立てるにせよ、習ったことはない言語によるコミュニケーション能力を報告するにせよ、自己評価が求められる

2.4 言語能力の評価

◎ ヨーロッパ言語学習記録

- 国際的に通用する学習記録の導入は、現在検討中である
- この学習記録によって学習者は、広範囲な言語にわたるあらゆる学習経験を記録し、複言語能力の進歩を記録することができる
- 能力の大部分は、学習記録がなければ、証明、認識され得ない

2.4 言語能力の評価

◎ ヨーロッパ言語学習記録

- 学習者が各言語についての最新の熟達度を自己評価することを推奨
- 記録の記載事項の信憑性が、責任を持って確実に保たれることが重要
- ここで、CEFRを参照するのは貴重なことである

2.4 言語能力の評価

◎ *Guide for Examiners*

- 公的な試験の指揮・管理やテストの開発に専門的に携わる者には、これと併せて9章を読んでほしい
- テスト開発と評価を詳しく扱っているが、9章とは相補的關係にある
- より詳しい参考文献、分析に関する付録、用語録も含まれている